大川小の校庭から インタビュー

津波で失ったもの 言葉にすることで 悲しみに価値を

東日本大震災で、宮城県石巻市の大川小学校に通っていた12歳の次女を亡くした。犠牲者は児童74人と教職員10人。学校で起きた悲劇の教訓は何か。第三者による検証委員会でも、別の遺族による裁判でも真相はわからない。中学の国語教師だった佐藤敏郎さんは、語りの不在と可能性について考えるようになったという。

「小さな命の意味を考える会」代表
佐藤 敏郎（さとう としろう） さん

1963年生まれ。元中学校教諭。NPO法人「キッズ・ナウ・ジャパン」理事、同「カタリバ」アドバイザー。共著に「16歳の語り部」

――28年続けた教職を離れ、防災について講演したり、地元ラジオ局でDJをしたり。熊本にも毎月通うなど、「あの日」について語ることが多いですね。

「大学生になった長女の言葉を時折、思い出すんです。あの朝、妹から『お姉ちゃん、おはよう』って言われたけど、機嫌が悪くて返事をしなかった。そしたら、そのまま帰ってこなかった。あんなに後悔したことはないって。いつかやるだろう、誰かやるだろうって、いろんなことを後回しにしてきた。それを突きつけられたのが震災だったはず。だからもう、後回しや人任せはやめよう。そう思って動いています」

――語ることについて考えるきっかけは何だったのですか。

「震災の2カ月後、勤めていた女川の中学校で俳句の授業をしたんです。校長から言われて。傷ついた生徒をさらに傷つけるんじゃないかと正直、怖かったですよ。恐る恐る、何でもいいから詠んでみろって呼びかけると、生徒たちはすぐに指を折り、五七五の言葉を探し始めたんです。驚きました。俺の授業であんなに集中する姿は見たことなかったです」

語ること、言葉にすることで

ただいま聞きたい声が聞こえない／みあげればがれきの上にこいのぼり／見たことない女川町を

受けとめる

輪郭が取れるというか、自分の身に起きたことがくっきり見えてくる。そうやって背中のリュックに何が入っているかが整理されると荷物の重みが変わるんですね。そうすると現実と向き合えるようになる。生徒たちから、語ることの意味を教わりました」

――10代の語り部たちも育てています。

「震災から3年ほどして、ある生徒の話を初めて聞きました。あの日、津波に流されていく大人の男性が目の前で、助けを求めて手を伸ばしてきた。でも、動けなかった。男性はそのまま波にさらわれ、見殺しにしてしまったというのです。当時、小学5年生。3・11について触れるのはタブーのような空気があって誰にも言えなかった、と。大人が封じてたんですかね。『あの体験が次の被害を防ぐのに役立つのなら伝えていきたい』と言って教え子の何人かが語り部を始めました。語ることの意味を見つけたようです」

――佐藤さんは大川小学校で、見学者の案内を続けています。

「震災の3日後、顔まで泥をかぶった子どもたちの遺体が川べりに並んでいました。あんな光景、絶対にあっちゃいけないですよ。ただ、俺たちのいまが、過去の多くの人々の悲しみの上にあるのだとすれば、悲しみは価値のないものではないはず。起きたことを、未来にとって価値あるものにしなきゃいけない。そう思うんです。だから案内の最後に、こう語りかけます。ここを何かを生み出す場所にしてほしい、って」

■

――大川小の子どもたちは地震の後、校庭で50分ほど待機し、川にかかる橋のたもとに避難しようとして津波にのまれました。

「最も安全なはずの学校で、あの子たちはなぜ死ななければならなかったのか。いまだに、わからないままなんです。石巻市教育委員会は生き残った子どもたちから聞き取りをしたにもかかわらず、記録を廃棄していました。その後、第三者の検証委員会が1年1カ月と5700万円かけて調査したものの、真因に迫ろうとしたようには見えません」

「生き残った子どもたちによると、校庭の裏にある山に逃げさせようと何度か口にした先生がいたそうです。前任校で防災マニュアルを改訂し、地域の自然教室で教えるなど防災意識が高かった。でも、『山へ』という声は組織の意思にはなりませんでした」

――生き残った先生が1人だけいますよね。

「はい。それが『山へ』と呼びかけた先生でした。いまも教壇に立つことはできず、家にこもりがちだと聞きます。せっかく生き残ったのに、彼が不幸になってはいけないですよ。生き延びたことを誰も責めたりしないでしょう。でも、あの日についてはずっと口をつぐんだまま。震災直後に1度だけ、遺族説明会にきて謝罪してくれたんですが、このときの説明は残念ながら矛盾だらけでした」

――亡くなった同僚の責任を問うことになるのを避けたかったのか。生き残った後ろめたさがあったのでしょうか。真相を語ることが、先生自身を救うことにはなりませんか。

「無理に向き合わせてはいけないし、togeをし続けるのもよくないと思います。ただ後になるほど、いろんなものが重なって蓋は上げづらくなる。もしかしたら、本人は話したくても、止めようとする外部の力が働いているのかもしれません。あるいは、すでに記憶を入れ替えてしまっているかもしれない。語っても語らなくてもいいのですが、ずっと出てこられないのはおかしいですよ。彼が再び、前に進めるように支えるのが市教委の役割ではないでしょうか」

異論に耳を傾け 語り合ってこそ ハーモニー響く

「真相解明をめぐっても、市教委は責任逃れの組織の言葉ばかりで、子どもの命の話にならないんです。あのとき、子どもたちはどんなに怖かったか。目の前で子どもを亡くした先生たちはどんなに悔しかったか。そこを出発点にしてほしいのですが」

■

――犠牲を招いた原因は何だと思いますか。

「あの日、先生たちは必死だったと思います。みんな、助けたいと思っていた。なのに助けられなかった。もう1人、覚悟をもって『山へ』と言えていれば……。でも、できなかった。想定外や初めてのことが起きたとき、いろんな意見が出るのは当然です。ただ、違う意見は批判と取られてしまう。自由に語りづらい。そんな日常の延長に、あの校庭があったのではないかと思います。だから講演でこう話すんです。『もしも』は『いつも』の中にある」

――教師だったからこそ、見えることもあるのでしょうか。

「震災直後に考えたのは、目の前の生徒にとって大事なのは何かということでした。人手が足りない、教材もない。混乱の中で通達は省略され、書類づくりも会議もない。それでも、学校は回っていた。何もないからこそ、本質に向き合うことができたのでしょう。逆に言うと、いかに必要ないものに囲まれていたか、ということです。見た目とか形式とか日程消化とかにとらわれていないか。上の指示やマニュアルに従っていればいい、と思ってはいないか。それで、いざというときに、大切なものを守れるでしょうか。きっと、日本の『大川小の校庭』があるんだと思います。だからこそ、空白の50分を解き明かすことが大事なんです」

■

――校舎は震災遺構として保存されることが決まりました。いまも年間1万人以上が訪れるそうですね。

「残したい、と最初に声を上げたのは、間一髪で生き延びた当時11歳の男の子でした。彼は大川小に通う妹、母親、そして祖父を亡くしています。誰のために残すかといえば、やはり50年、100年先に生きる未来の人のためです。でも、簡単に決めたわけじゃないんです。もう自にしたくないという声もあった。それでも昔の人が残すことにしたのはなぜか。無言だけど雄弁な校舎を見て、その理由を考えてもらいたいですね」

――この間、もどかしい思いをすることもあったようですね。

「何か言うと、すぐに『遺族が騒いでる』となって、対話が断たれてしまうんです。考えが違うだけで『対立』と報じられる。子どもの命を救える学校にしなきゃいけない、という思いは同じはずなんですけどね。意見が違うからって敵じゃない。言葉を重ねようちに何かが見えてくる、と信じたいじゃないですか。だって、敵じゃなければ無敵でしょ。市教委も先生も遺族も裁判官も記者も、みんな同じ船の乗組員なんです。そこには、あの子たちも乗っていると思います」

――とはいえ、異論と共存するのは簡単ではなさそうです。

「被災地で音楽の支援を続けるゴスペラーズのメンバーとも話したんですが、ハモるには自分の音をしっかり出すだけじゃなく、ほかの音にも耳を傾けなきゃいけないそうするとで、ドでもミでもソでもない、ドミソの和音ができる。それがハーモニーなんだって。ひとつの考えに染めたり、自分だけ主張したりするから不協和音になる。いろんな声がハモれる世の中になってほしいですね。あの校庭が、そのきっかけの先端の1つにでもなれば」

（聞き手・諸永裕司）

「防災とは、突き詰めれば『ただいま』を言うことだと思います」＝福留庸友撮影